

# ある大衆作家

## 古山登

直木(三十五)賞といえは、同時に創設された芥川(龍之介)賞と共に、数多い文学賞の一つとしてその存在を知られているが、一方の芥川龍之介の作品は高校の国語教科書にも収録され、どの文学全集でも一巻本になったり文庫本にもなって没後も長く読み継がれているが、直木三十五の作品を読んだことのある人は果して何人いるだろう。

尤も、読みたくても、一昨年小部教復刻出版された(示人社刊)改造社版『直木三十五全集』(全21巻、昭9-10)を除いては、今や彼の著書を手に入れることは殆んど不可能に近いことだから、読む術もない。大衆作家の場合、直木のみならず、生前どんなに華々しく活躍した流行作家でも、亡くなってしまふと同時に著書の売れ行きが落ち、時を経ずしてその作家の名前を書店で見られ

なくなるというのが通例で、これは読み物作家・大衆作家の宿命といつていいだろう。その理由は、幾つか考えられるが、その一つとして、大衆小説(特に現代小説)の場合週刊誌などいわゆるマガジンを主な発表の場とする関係もあって、作品の内容は必然的に同時代の世相や風俗に影響されざるを得ないということがある。だからこそ毎日(新聞)

毎週(週刊誌)毎月(月刊の大衆・婦人誌)興味をもって愛読されまされるのだから、さて、著者が亡くなってしまふと、途端に、かつては共感をもって受け止めた時代相や流行風俗は色褪せた古いものになってしまう。例えば、新聞、週刊誌、婦人雑誌の超人気作家として持て囃された獅子文六(明26-昭44)の場合。さすがフランス近代劇の權威だ

けあって、会話の妙など軽妙洒脱な筆捌きは

それだけで読者を魅きつけるものがあつたが、何よりも、ユーモアとサタイヤーに溢れた構成と描写で戦後の風俗や考え方を見事に描き出した技術で評判となり、おかげで掲載紙『朝日新聞』の部数が大巾に伸びたとさえいわれる『自由学校』(昭26)をはじめ出版する作品の殆どがベストセラーになったものが、亡くなって新聞、雑誌の目次にその名が見えなくなると途端に売れ行きが落ちたといわれている。時代小説の吉川英治(明25-昭37)と共に大衆文学の双壁と併称された超人気作家にしてこの有様だから、他は推して知るべしといつていいだろう。

ところが、近年、このほぼ定説といつていい現象に異変が起きているという。

その一例が梶山季之氏(以下敬称略)の場合だ。梶山季之は昭和四年、京城生れ。広島高等師範を卒業後、文学を志して上京、有吉佐和子(昭6-59)三浦朱門(大15-)曾野綾子(昭6-)阪田寛夫(大14-)らと同人雑誌第一五次『新思潮』を発行し一途に文学修行に励むが、取材力の旺盛さと筆の速さが文藝春秋の池島信平(明42-昭48)編集局長らに認められていわゆる「トップ屋」として重宝がられ、結局そのことが彼の作家生活の

方向を決定することになった。

梶山季之が文壇にデビューしたのは昭和三十七年、いわゆる企業スパイものの走りといわれる作品「黒の試走車」を提げてのもので、推理小説史上新分野を拓くものとして評判になり、彼は忽ち流行作家の地位を獲得した。

それから香港で客死するまでの十三年間、彼は働きに働きつづけた。週刊誌を主舞台に執筆量は凄まじいと表現するのが適切であるともいえるような仕事ぶりで一カ月の執筆量が千枚を超えることさえあったという。

その間、右手人差し指の腱鞘炎に罹りペンが握れなくなったり、若い頃の肺結核が再発して入院生活を余儀なくされた時期もあった。そして晩年は死病となった肝臓癌に苦しめられたが、彼は休むことなく書きつづけた。しかし香港のホテルで四十六年の生涯を終えた時、彼の家族には借金以外の遺産は土地建物（自宅マンションと事務所、伊豆の山荘など）だけしかなかった。いったい肉体がポロポロになるまであんなに稼いだカネは何処へ行ってしまったのか。多くの人が疑問を抱いた。

答えは簡単であった。第一は、彼は、ノンフィクション作家を目指す数人の青年の私的な取材陣を養っていたことである。正確で豊

富な資料あってこそその「梶山文学」であったから、勿論取材費に糸目は着けなかった。一

人二人なら別として、いわば食客ともいえる人々を多数抱えこみ、その生活費と取材費の全額を負担したのではなかったものではない。その上、彼は実にしばしば若い編集者に御馳走した。そこには、功利の意図らしいものは全く感じられず、勘定は総て自分持ちで、数が多かったから、この方の金額もばかにならなかつた。そんな工合だから、稼いでも稼いでもいわずゆる「自転車操業」であつた。

一方、彼はライフワークとして、日系朝鮮人ハワイ移民を描く作品（仮題「積乱雪」）を書くことを作家生命として、構想を練り膨大な資料を収集していたが、けっきょく毎日の稿料稼ぎに追われ、この雄図は数枚のメモに書き残したに止まつてしまった。

当然、後世に遺るような文学的に優れた作品が書けるような余裕はなかつた。だから彼が急逝した時、彼の友人たちは爾後の遺族の生活を深刻に心配したものである。

ところが、この心配は杞憂であつた。彼の没後も、既に十七年も経つたというのに新刊増刷合わせて年間ほぼ百万部が毎年売れているというのである。これは大衆小説、殊に現

代小説は作者の没後は急激に売れ行きが止まるといふ定説にとつて驚異であつた。

この現象を、一九八〇年代に始まつた文庫合戦が生み出した企画の枯渇と大手出版による激しいマスプロ・マスセル競争の申し子として、岩波文庫が代表する「文化的商品」としての文庫本と比較して慨嘆する読書者も多いが、果たしてそれだけだろうか？

総ての大衆・現代作家が同じような幸運に浴しているとなればこの指摘は正しいと見るべきだろうが、必ずしもそうではないところを見ると、矢張り梶山季之の作品には彼ならではのがあつたのだろう。

そして、彼ならではのものとは何であつたか、はつきりとは掴めないが、彼の場合、確かに一人の風俗作家・ミステリー作家・ポルノ作家（晩年）として片付けられるかも知れないにしても、彼が、正確な資料を豊富に使つて、風俗や社会風潮を描く際にも単純に風俗・社会風潮を反射的に表現するのではなくて、それらを資料と対比して自分なりに咀嚼していたことに、彼が定説を覆して没後も長く生き残っている秘密の一端があるように愚考するのだが、いかがであらうか？